様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：３２６５１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１２３２０

研究課題名（和文）両親のしつけセルフトリアージ尺度の開発と子育て世代包括支援ケアシステムの構築

研究課題名（英文）Development of the Parents' Discipline Self-Triage Scale and the Construction of a Comprehensive Support Care System for the Parenting Generation.

研究代表者
細坂　泰子（Hososaka, Yasuko）

東京慈恵会医科大学・医学部・教授

研究者番号：９０４５９６４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はしつけに悩む両親が自分自身分でその危険度をトリアージできる尺度を開発し、子育て世代に対する包括支援ケアシステムを構築することである。本研究では父親・母親が自分自身でしつけを判断できる尺度を作成することで不要な育児不安を減らし、それらを用いた子育て世代包括ケアシステムを構築することで、有効な育児支援につながると考えられた。父親へのインタビュー研究では、虐待に転じる可能性のある因子として子どもの属性や、親の体調、子どもの泣きなどがトリガーとなる可能性があった。さらに今までの知見を統合し、「母親および父親のしつけセルフトリアージ尺度」を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では父親・母親が自分自身でしつけを判断できる尺度を作成することで専門家の助言なしに自らが育児を省みることができる尺度を母親用、父親用で作成した。これによって両親の育児不安を軽減することができると考えられる。また母親を対象にした先行研究で明らかになっていたしつけと虐待の境界について、父親にも研究を行い、母親と父親の差異や共通項を見いだした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a scale that allows parents who are troubled by discipline to triage the degree of danger by themselves. In the interview study with fathers, the attributes of the child, the physical condition of the parent, and the child's crying were possible triggers as factors that could turn into abuse. Besides, we integrated the findings to date and developed the Mother and Father Discipline Self-Triage Scale.

研究分野：母性看護学

キーワード：しつけ　虐待　境界　しつけセルフトリアージ尺度　母親　父親

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

児童虐待相談対応件数は、調査が始まった 1990 年から年々増加し続け、2016 年は半期で既に 24,511 人となり、前年同期比 42.3%と激増し（警視庁 2016）過去最多を更新している。増加し続ける児童虐待の問題に対処すべく、2000 年には「児童虐待の防止等に関する法律」が制定され、2004 年には同法を改正し、体制強化を図っている。しかし現在も虐待死、相談件数ともに増加し続けており、解決には至っていない。

2014 年度に虐待死した子どもの年齢内訳は 0 歳児が 61%と最多で、89%が 3 歳児までの乳幼児である（厚生労働省 2016）。虐待の加害者の多くは実母であり、リスク要因として望まない妊娠や経産婦（林田　2013）、自尊感情の低下（黒澤ら　2005）など複合的に問題が存在する。一方で今年度に急激に増加したのが心理的虐待で、前年同期に比べて約 5 割が増加した。この理由として国民の意識の高まりが通告の増加につながっていると考えられているが、実際には虐待にあたらない育児をしている母親も育児に自信がもてないことから虐待不安が高まっている可能性があり、育児不安につながる例も少なくない。また父親は母親よりも虐待に寛容である傾向があり、虐待的子育てを行う傾向のある父親は 28.1%と高い（杉本ら　2015）など、母親だけでなく父親に対する育児支援も欠かせないものとなってきている。

これらのリスクを早い段階で発見し、虐待発生を防ぐための地域や産科施設の連携（大友 2013）やリスク要因発見のための尺度の開発も研究が進んでいる。尺度としては日本版エジンバラ産後うつ病自己評価表の活用（岡野 1996）や、育児ストレス尺度（手島 2003、清水 2010）、潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度（花田 2007）などが開発されているが、いずれも医療従事者がスクリーニングとして虐待予備軍を抽出する尺度であり、育児の真っただ中にある父親や母親が自分自身でチェックできるものはない。

研究者は研究責任者としてH26～28 年度文科省科研費　基盤研究（C）で「しつけと虐待の境界に不安をもつ母親への支援研究」を行ってきた。研究１では母親 26 名を対象に修正版グラウンデッドセオリーを用いて、しつけと虐待の境界の様相を明らかにした。その結果、境界に関連する様相を示すカテゴリーとして【無意識に存在する母親から子どもへのパワー】と【子どもの属性で異なるしつけ】が抽出された（結果は学会発表を済ませ、原著論文として投稿中）。研究１の結果は四コマ漫画を用いたパンフレットにまとめ、そのパンフレット 350 部の効果検証を行ったのが研究２である。研究２は現在分析中で今年度中には結果を公表予定である。これらの結果では育児の当事者である母親はもちろん、父親も含めて育児に対する自信の欠如が如実に示され、他者を含めた客観的な肯定が両親を安心させることが明らかになった。客観的指標である尺度を用いて、育児に問題のない両親には「大丈夫だよ」と育児を肯定し、支援が必要な両親には、今後の具体的な行動を示していくことで、どの両親にも適切な支援が可能になると考えられた。しかし研究結果から育児は家庭内のルールとして行われている傾向があり、医療者など他者が直接育児やしつけに介入することは難しい。そのため両親が自分自身の育児におけるしつけの姿勢を評価する必要がある。

２．研究の目的

本研究では父親・母親が自分たちの育児を客観的に自分で評価できるための「両親のしつけセルフトリアージ尺度」を開発し、それらを用いた子育て世代包括ケアシステムの構築を行うことを目的とする。尺度を用いて両親が自分たちの育児を評価することで自信を深め、また必要な支援を受けることで、健やか親子 21 の重点課題①として位置づけられている「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」の一助となることができると考えられる。

３．研究の方法

研究目的を遂行するために、3 つの研究を実施し、最終的に子育て世代に対する包括的支援システムの構築を行う。

研究１　父親の育児不安・虐待不安の記述的研究では父親が物語るしつけに関連する育児不安や虐待不安について、その本質を明らかにする。

研究１の実施
1)　研究対象者の協力依頼
ネットワーク抽出法、および幼稚園・保育園および団地等でのポスターによる参加者を募り、意思を確認したうえで、研究者から連絡を取り、文書と紙面で同意を得る。
対象者：3 歳児を養育する父親 30 名
2)　学童前児童を養育する父親への質的研究実施
同意を得られた父親を対象に、父親の成育歴や感情を含めた語りの中の育児体験をもとに、それぞれの事象の中でのしつけに関連する育児不安・虐待不安を明らかする。インタビューは研究者との関係性の中で、バイアスが生じにくい対象を抽出（社会的地位、依存性、所属組織等）する。インタビューは平成 29 年度を予定している。対象人数は 30 名とし、1 時間～1 時間半程度のインタビューを行う。インタビューは、基本的属性の他に、個々の背景、事象を明らかにするため、インタビューガイドを作成した半構造的面接法で行う。
3)　分析方法
　研究 0 と同様に、修正版グラウンデッド・セオリー法を用いて分析する。また同時に質的データを客観的に分析するために、質的データソフト NVivo を用いて分析する。分析テーマは「父親は日々の育児の中でしつけをどのように認識し、どのような育児不安・虐待不安の特徴があるのか」とする。分析は逐語録を熟読後、文章または段落ごとに抽出、解釈し、事例の背景を詳細に検討しながら概念を生成する。

研究２　両親のしつけセルフトリアージ尺度の開発では研究１および研究代表者の先行研究から尺度項目の検討・作成を行う。
　研究１および研究 0 のデータ、文献検討から尺度項目を作成し、尺度として開発を行う。
1)　ターゲットとする構成概念に潜在的に関連するすべての内容を系統的に抽出
2)　下位概念を構成する各内容領域に適切な項目サンプルが入るように生成
3)　尺度の内的妥当性の検討・パイロットスタディを用いてデータに基づいて、修正を行う

研究 3　両親のしつけセルフトリアージ尺度の効果検証では作成尺度項目の因子構造の把握、および尺度の信頼性・妥当性の検討を行う。
　研究２で作成した尺度の効果検証を行う。
1）　比較のためのアンカー尺度の選定およびサンプルの考慮（現時点では適度に不均質なサンプルと考えられること、回収率を考慮して父親・母親各 500 名とする）・リクルート
2）　尺度を用いた自記式質問紙の配布
3）　結果の分析（因子分析、天井・床効果の測定）、内部一貫性の確認、信頼性の確認、項目間相関、主成分分析、既存の尺度の相関等）
4）　最終版　両親のしつけセルフトリアージ尺度の完成

４．研究成果

研究１
　計画通り、 乳幼児を養育する父親で、研究の主旨に同意した 11 名を研究参加者とした。データ収集期間は 2018 年 3 月～2019 年 1 月で、半構造的インタビューを実施した。インタビューガイドに基づき、父親の育児の認識、育児不安・虐待不安を感じた時の具体的内容とその思い、育児やしつけへの父親の立ち位置等を尋ねた。研究参加者の許可を得て IC レコーダーでの録音およびノートに記録をとった。インタビューデータから作成した逐語録を繰り返し読み込み、語りの中から父親が育児と虐待の境界について感じていることに焦点をあて、その背景も加えて〈コード〉として抽出した。コードの意味内容の類似性や差異性に着目し、比較検討を繰り返しながら、《サブカテゴリー》、【カテゴリー】へと抽象度を上げた。研究の真実性・妥当性を高めるため、全過程を通して研究者間で検討を繰り返した対象者には研究の趣旨と匿名性の保持、自由意思での参加、結果の公表等について書面と口

頭で説明し、同意を得た。また研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号 29-253（8869））。

乳幼児をもつ父親は、【父親の育児・しつけ観】と【生育経験や夫婦を基盤とした育児姿勢】を基盤として育児やしつけを行いつつも、【漠然とした育児に対する畏怖】や【父親の育児への関わりにくさ】を認識していた。また育児と虐待の境界として【虐待が入り込む育児の隙間】を感じていた。研究参加者の全員が育児に関わりたいという意思のある父親であった。しかし日常的な育児の中に虐待に転じる可能性のある様々なコードが抽出され、子どもの属性や、親の体調、子どもの泣きなどがそれらのトリガーとなる可能性があった。

【父親の育児・しつけ観】、【生育経験や夫婦を基盤とした育児姿勢】を強化し、【漠然とした育児に対する畏怖】【父親の育児への関わりにくさ】、【虐待が入り込む育児の隙間】に介入することで、父親の育児と虐待の境界が広がり、育児が虐待に直接的に移行することを阻害できる可能性が示唆された。

研究は現在英文誌に投稿中である。

研究 2

親の育児行動やしつけ，虐待に関連する先行研究を Pub-Med と医学中央雑誌で，「child care（育児）, discipline（しつけ）, abuse（虐待）, upbringing（養育）,scale （尺度）, measure（測定）」のキーワードを用いて，全年の文献を検索した。尺度案の網羅性を確保するために，文献内で引用された関連尺度も検討した。検索結果から尺度の構成概念を抽出し，抽出した 6 の概念について定義づけを行った。両親に共通する概念を，〔親の養育態度と子ども認知〕〔親から子どもへの無意識なパワー〕〔虐待他者評価不安〕とし，母親のみに存在する概念を〔虐待自己評価不安〕〔周囲の支援〕，父親のみに存在する概念を〔父親の育児への関わりにくさ〕とした。先行研究および既存尺度を参考に，概念ごとに 10～13 項目の項目プールを作成し，母親のしつけセルフトリアージ尺度（以下，母親尺度）を 54 項目，父親のしつけセルフトリアージ尺度（以下，父親尺度）を 42 項目とした。尺度は「非常にそう思う：1 点」から「まったくそう思わない：6 点」の 6 段階リッカートスケールとした。内容妥当性と網羅性の評価は，専門家（修士以上の学位を保有している母性，小児，地域看護学の大学教員 12 名）が行った。内容妥当性調査では，各尺度に対し，しつけをトリアージできる内容であるかどうかをそれぞれ 4 段階（1.不適切,2.適切性にやや問題あり，3.適切だが表現に修正が必要，4.非常に適切）で評価してもらい，内容が網羅されていない場合には追加項目を求めた。調査結果より，各項目の内容妥当性比（content validity ratio(CVR)を（ne－N/2）/(N/2)で求めた（ne＝項目を 3 ないし 4 と評価した評価者数；N=全評価者数）。CVR は 10 名の 0.62 を基準とし，満たない項目は削除した。CVR が 0.62 未満だった項目は，母親尺度では問 4，7，12，41，45 の 5 項目で，父親尺度では問 7，12 の 2 項目であった。また母親の概念〔周囲の支援〕は尺度項目ではなく対象者の属性であり，独立変数とした方が良いのではないかとの指摘があった。指摘に対し，研究者間で話し合い，母親尺度の問 44～54 を削除することとした。母親尺度の概念は 4 概念 39 項目，父親尺度は 4 概念 40 項目となった。質問項目は木原を参考に，識字能力に見合った文章，あいまいさの削除，二連項目の削除，専門用語がないこと，価値判断が誘導がないこと，肯定・否定分がおよそ同等か，単語数が 45 文字以下か，を検討し，質問文を精錬した。

研究 3

幼児を養育する両親を対象とした。機縁法を用いて研究の説明を行い，研究の同意を得られた A 幼稚園に 3～6 歳の子どもを預ける両親 191 組を対象とした。項目分析、是認率、因子分析、Cronbach’s α 係数を求め、信頼性と妥当性を検討した。研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号 31-314（9891））。

探索的因子分析の結果，母親では【虐待他者評価不安】【虐待自己評価不安】【育児焦燥感】【母親から子どもへの無意識のパワー】の 4 因子 22 項目が抽出された。父親では【父親の育児への関わりにくさ】【父親の子どもに対するストレス】【父親から子どもへの無意識のパワー】の 3 因子 12 項目が抽出された。各下位尺度の Cronbach’s α係数は 0.81～0.92 および 0.76～0.80 であった。信頼性と妥当性が検証された母親および父親のしつけセルフトリアージ尺度が開発された。

研究 2 および 3 の結果は既に原著論文とした採択された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 細坂泰子、茅島江子	４．巻 62（2）
２．論文標題 幼児を養育する母親および父親のしつけセルフトリアージ尺度の開発のための検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 母性衛生	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 末延睦与、細坂泰子、谷津裕子	４．巻 61（4）
２．論文標題 病産院での立ち会い分娩における夫への関わりに対する助産師の困難感	５．発行年 2021年
３．雑誌名 母性衛生	６．最初と最後の頁 694-703
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 美濃口真由美，細坂泰子，茅島江子	４．巻 61（1）
２．論文標題 育児期女性のアイデンティティ様態と育児ネットワークとの関連	５．発行年 2020年
３．雑誌名 母性衛生	６．最初と最後の頁 104-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 佐藤 さとみ、細坂 泰子	４．巻 34（3）
２．論文標題 特定保健指導の積極的支援対象者が初めての積極的支援を終了した過程	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人間ドック（Ｎｉｎｇｅｎ　Ｄｏｃｋ）	６．最初と最後の頁 497～505
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11320/ningendock.34.497	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 細坂泰子、柏崎真由	4．巻 134（5）
2．論文標題 日本語版Quality Assessment Tool for Quantitative Studies（J- QATQS）の等価性を担保した作成および信頼性の検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京慈恵会医科大学雑誌	6．最初と最後の頁 75-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 細坂泰子、茅島江子	4．巻 59（4）
2．論文標題 育児支援における4コママンガの活用～しつけと虐待の境界に焦点を当てて～	5．発行年 2019年
3．雑誌名 母性衛生	6．最初と最後の頁 896-905
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細坂泰子、茅島江子	4．巻 37
2．論文標題 乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本看護科学学会	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 細坂泰子、茅島江子
2．発表標題 乳幼児をもつ父親の育児と虐待の境界の様相
3．学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuko Hososaka, Kimiko Kayashima
２．発表標題 Utilization of Four-frame comic manga in childcare support in Japan: focusing on the boundary between discipline and abuse.
３．学会等名 16th WAIMH WORLD CONGRESS（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayu Kashiwazaki Yasuko Hososaka,
２．発表標題 A Literature Review of Factors Related to Breastfeeding in Japan
３．学会等名 16th WAIMH WORLD CONGRESS（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 細坂泰子、柏崎真由
２．発表標題 日本語版Quality Assessment Tool for Quantitative Studies（J-QAT）の作成および検者間信頼性の検討
３．学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 一木ひとみ、細坂泰子、櫻井尚子
２．発表標題 20年以上仕事を継続してきた女性労働者の働き続ける力に関する研究
３．学会等名 第28回日本産業衛生学会全国協議会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤さとみ、細坂泰子
２．発表標題 特定保健指導の積極的支援対象者が初めての積極的支援を終了した過程～健康認識と行動の変容に焦点をあてて～
３．学会等名 第59回日本人間ドック学会学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 嶋澤順子、梶井文子、細坂泰子 田中幸子、内田満、北素子
２．発表標題 東京慈恵会医科大学医学部看護学科におけるディプロマ・ポリシーを真に達成する教育改革への挑戦
３．学会等名 第28回日本看護学教育学会学術集会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	茅島　江子 (Kayashima Kimiko) (70125920)	秀明大学・看護学部・教授 (32513)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関